国立研究開発法人　量子科学技術研究開発機構 QST 病院
副病院長　石川　仁

この度、第 27 回癌治療増感研究会大会長を拝命し、2022 年 4 月 23 日（土）に大洗町 Hosoda hall にて開催させて頂く運びとなりました。本研究会は、がん治療に関わる基礎、臨床の様々な分野における研究者が集い、各種癌治療法の治療効果を増強する方法の研究、ならびに長期生存を達成するためのマルチモダリティ治療法の研究と普及を推進し、もって人類の福祉に貢献することを達成することを目的に毎年開催されてまいりました。このような歴史のある研究会を主催できることを光栄に感じております。

2020 年 1 月以降、新型コロナウィルスによる感染拡大に伴い、あらゆる活動が制限される事態になりました。本会の開催に際しましては、多方面の方々のご尽力があって実現致しました。とくに、第 26 回大会長の小川和彦先生、ならびに関係の方々におかれましては特別なご配慮を頂きまして心から御礼申し上げます。

がん治療に関わる様々なモダリティはこの十数年で飛躍的に向上しています。私が専門としている放射線治療においても、単に照射技術の進歩だけではなく、画像診断学、分子生物学、物理工学、免疫学、など様々な研究成果に支えられながら治療成績の向上が図られています。とくに、最近の腫瘍免疫に関する研究成果は肺癌をはじめ多くの疾患の標準治療を変えることにも繋がっています。そこで、本研究会では、画期的集学療法の開発に向けた免疫療法時代の癌増感研究として、Basic and clinical studies to standardize evidence based multimodal therapy-Try to discover new things tomorrow by taking lessons from the past-のテーマで開催することに致しました。

私の恩師である故新部英男・群馬大学元教授は、放射線治療における宿主の免疫反応を常に意識し、私が入局した 25 年以上前には腫瘍病理学をもとに個別化した治療の実践をされていました。患者の血液、画像検査とともに生検組織を事前に確認し、照射効果や予後を予測して、照射範囲や照射線量、補助療法などの検討を行っていました。当時の私にとっては十分に理解できませんでしたが、病理組織を検鏡する習慣と同じ疾患でも腫瘍の顔つきには大きな差があることを知ることができました。現在、このような宿主の免疫状態、および腫瘍免疫応答を予想し、把握する様々な技術が応用できるようになり、新部先生が言わんとしていたことを実感できるような時代になりました。

がん研究は、現在の問題点を抽出し、その克服のために解決策を見出し、実践して評価することを連続することであり、課題は尽きません。また、その時点では十分な結果が得られなくても、他の分野が発展することで克服できるようにもなります。本研究会は、がん研究に関わる多分野の研究者が集結し、さまざまな角度から討論する刺激的な場であります。

2 年ぶりに開催する今回の研究会が、蓄積されたアイディアや成果を活発にご討論頂ける
ような場になれば幸いです。